

宮城県のスポンザル

第 4 号

奥新川のスルの生態

平成元年5月

宮城のスル調査会

奥新川のサルの生態

石巻市立東浜小学校

遠藤 純二

1、はじめに

東北地方のニホンザル野生群に関する本格的な調査は、青森県下北半島と、宮城県金華山の2ヶ所以外には行われていない。特に東北地方の中央部を南北に縦断する奥羽山脈一带については、古くからサルの生息が知られていたにもかかわらず、今日までその生態は明らかにされていない。

筆者は1982年5月より、奥羽山脈の東斜面、宮城県仙台市新川地区（通称「奥新川」）に生息する野生群の生態調査を継続してきた。以下に1987年4月までに得られたデータをまとめる。調査日数は合計163日である。

2、奥新川の概要

奥新川とは、仙台市新川地区のうちJR仙山線奥新川駅のある広瀬川支流の新川川水系一帯の呼び名である。この地域は面白山の麓、県立自然公園二口溪谷にも指定されており、春から秋にかけては多くの行楽客で賑わいをみせる。

標高はおよそ300mから1000mの範囲にあり、新川川とその大きな2つの支流北沢と南沢を中心に、何本もの沢が刻まれている。それらの沢沿いは急峻な斜面が多く、特に沢筋では、ほぼ垂直に近い岩場となっているところもある（図1）。

この地域の植生については、これまでOhasi・Sugaya（1963）、ふるさと宮城の自然編集委員会（1988）などの報告がある。この地域の植生は、ブナ・チシマザサ群落に属する。だが現在は尾根筋や

一部の場所にブナの原生林が残っているほかは、ほとんどがコナラ・ミズナラを中心とし、ハウチワカエデ、イタヤカエデなどのカエデ類やアカシデなどが混生した2次林となっている。また、標高がおおよそ500m以下の場所には、コナラ・クリ林もみられる。

林床部は、背丈をゆうに越えるチシマザサを中心に、ツツジ、シャクナゲ、オオバクロモジなどの密生しているところが多く、林内の見通しはきわめて悪い。

一年を通して降水量が多く、12月から3月までの冬季には季節風が強く吹き込み、それとともに多くの積雪がある。積雪量は年によって差があるが、多い時には奥新川駅付近で1m以上、標高の高いところでは2mを越すところもある。そのため、冬季には積雪によって林床部のチシマザサなどが覆われてしまうため林内の見通しがよくなり、サルの観察には大変都合がよい。

また、冬季には気温も氷点下に下がり、真冬日も多くなる。そのうえ強い季節風によって体感温度は気温よりかなり低くなると思われる。

3、奥新川のサルの歴史

奥新川にいつ頃から群れが生息するようになったかは定かでない。しかし、この一帯に「猿倉沢」、「猿倉」、「エンコ沢」などサルに由来する地名があることや、大正時代に行われた長谷部言人博士によるアンケート調査（伊沢・遠藤，1987a）に、この一帯にサルが生息していたとする解答があることから、古くからサルが生息していたことは疑いない。

地元の人の話によると、昭和の初め、北沢の上流の新川岳で群れが見られていたという。

現在のように、奥新川の駅付近に群れが姿を見せるようになったのは、はっきりした時期はわからないが、聞き込みでは1979年から1980年にかけてのことのようである。

この群れ（以下、「奥新川の群れ」と呼ぶ）の由来についてははっきりしないが、かつて北沢の上流の新川岳で群れが見られていること、現在、新川岳に隣接する関山に群れが生息していること（伊沢・遠藤，1987b）、奥新川の群れの遊動域が少しずつ北沢上流から下流に移ってきてい

ること（8頁参照）などから、かつて関山から新川岳に生息していた群れと深い関係があることが推測できる。

4、群れの数と個体数

先に述べたように、奥新川の林内はどこも見通しが悪く、群れの個体数や構成を完全に確認することはきわめて困難である。その中で、良好な条件下でカウントした群れの個体数と構成を表1に示した。

それぞれの合計頭数に開きがあるが、これは野生群であるため群れがかなりの広がりをもってしまい、群れの一部しか数えられなかったためである。また、この中で1985年5月5日、12月1日、1986年1月12日、2月11日の4例は、奥新川の群れが分派行動を起こし、群れが2つ（1985年5月5日は3つ）に分かれて遊動しており、その一方のみをカウントしたため、個体数が少なくなっている。

奥新川の群れの個体数の最大値は1987年1月18日の83頭である。この時は積雪があり、群れ全体を見渡すことができたため、ほぼ全個体を数えることができた。ただ、季節によって群れと行動をともにするオスの数に差が出てくるから、そのことを考慮に入れると、1987年の時点で群れの個体数は約80頭とみてよいだろう。また、前年の8月31日にアカンボウ（0才）が7頭まで数えられているのに対し、この時にはアカンボウが1頭しか数えられていないが、性・年齢不明の37頭の中におそらくこれらアカンボウも含まれていたと考えられる。

奥新川の群れの個体数は1983年以来、ほぼ毎年60頭以上が数えられ、1987年まで横ばいから、ゆるやかな増加傾向が認められる。

ここで興味深いことは、例年に比べ積雪が多く気温も低く異常気象といわれた1983年から1984年にかけての冬季間に、石川県白山の群れ（滝沢・志鷹，1985）や、宮城県金華山の群れ（佐藤，1988）などで個体数の激減が報告されているにもかかわらず、奥新川の群れでこの冬季間の前後の個体数の変化をみると、必ずしも同様のことが起こったとはいえないことである。すなわち、1983年の12月4日に63頭が数えられたのに対して、翌1984年9月16日には36頭しか数えられておらず、このことだけからは個体数が大幅に減少しているように見えるが、

後者の観察時には群れが沢をはさんで大きく広がってしまい、群れの一部しか数えることができなかつたためである。一方、アカンボウの数をみると、1983年12月に12頭が確認され、翌1984年9月には7頭（1才として記載）が確認されていることからして、もし仮に1才がこれですべてだとしても生存率は58%と、その半数以上が冬を生きのびたことになる。実際には、このほかにも数え落しがかなりあったはずであり、この冬のアカンボウの生存率はもっと高かったと推定できる。

奥新川の群れが、その冬に大量に個体数を減少しているとすれば、体力的に最も弱いアカンボウの数が激減していなければならないだろう。また、その後の群れの個体数をみると、不完全なカウントによる数の少なさはあるものの、個体数の減少は認められず、むしろ少しずつ増加している。これらのことから考えると、金華山や白山で大量死があった冬に、奥新川の群れでは、大量死と呼べるような個体数の減少はおそらくなかつたものと思われる。そのひとつの理由として、群れが、前年の秋ブナの実がほとんど実らなかつたにもかかわらず、ブナにかわる食物としてコナラやクリの実を求め、新川川下流を新たに利用し始めたことがあげられる。

5、出産期、交尾期

奥新川の群れの出産期、交尾期については、まだ断片的にしかわかつていない。

これまでに出産と交尾が最初に確認された月日をあげてみると、出産は、1983年が5月3日、1984年は不明、1985年が4月14日、1986年が4月27日と、ほぼ4月、5月に集中している。一方、交尾については、1982年が10月7日、1983年が10月29日、1984年が9月29日、1986年が10月11日と、10月が多くなっている。また、出産期の終りは確認できていないが、交尾については年によって差はあるものの、12月中は交尾が観察され、1月に入るとほとんど交尾は観察されていない。これらのことから、およそその出産期、交尾期は、出産期が4月から6月、交尾期が10月から12月であると推定できる。

6、分派行動

群れがいくつかのグループに分かれて行動する分派行動は、各地の野生群で報告されている（伊沢，1982、など）。奥新川の群れでも、これまでに分派行動が観察されている。その中で、直接観察され、確実に分派行動と判断できる事例を表2に示した。

奥新川の群れの分派行動は1983年から1984年の大雪の冬の頃からみられるようになった。そして1985年以降、かなり頻繁に分派行動が観察されている。特に、1985年までは主に4月から11月までの非積雪期に多く分派行動が観察されていた。これは、積雪がなく広い地域に食物を求めることができる季節には、群れは分派を作ってそれぞれのグループが独自に遊動し、食物を手に入れることができる場所が限られてくる積雪期には、再び群れがひとつにまとまるが多くなるためだと考えられる。

ところが1985年以降、非積雪期だけでなく積雪期にも頻繁に分派が観察されるようになった。奥新川の群れがなぜ分派行動を頻繁に起こすようになったのかについての、はっきりとした理由はまだ明らかになっていない。ただ、考えられるいくつかのこのなかで、個体数の増加による群れの分裂の前兆ということがあげられる。

石川県白山の報告では、群れの個体数が70から80頭を越え始めると分派行動を繰り返し、ついに群れが分裂することが報告されている（伊沢，1984b）。また、長野県志賀高原のいくつかの群れ（和田，1979）や、金華山（伊沢，1984a）などにおいても同様の事実が報告されている。これらと比較すると、すでに述べてきたように奥新川の群れの個体数が80頭を越えていることや、分派行動が頻繁に観察されていることなどは、他の積雪地域の群れの分裂の前兆と一致している。今後、奥新川の群れが分裂することは十分に予想される。また、この群れの分派が観察されるようになってきた時期は、遊動域が新川川下流方向へ拡大し始めた時期とほぼ一致している（8頁参照）。

その他、分派行動中のそれぞれのグループの個体数をみると、およそ30頭前後と40頭前後の2つのグループに分かれることが多い。それぞれの構成については詳しく調べられておらず、グループのメンバーがいつも同じであるかどうかなどについては、今後の課題として残されている。そ

それぞれのグループ間の直線距離は最も近い時で0.5 km (この時は尾根をはさんで両側を遊動した)、最も離れた時で3.1 kmであり、積雪のある季節にはその平均距離は1.2 kmであるのに対し、積雪のない季節の平均距離は2.4 kmと、積雪期に比べ、非積雪期の方が分派グループ間の距離が遠くなる傾向がみられる。

7、ハナレザル、オスグループ

調査期間中、何例かのハナレザルやオスグループが観察された。しかし、金華山のような孤立した島という生息環境とは異なり、奥新川のような山塊が連続した広大な生息環境では、ハナレザルやオスグループとの出会いは、ほとんどが偶然に左右される。そのため、まだまだ事例が少なく、奥新川の群れとハナレザルやオスグループとの関係などは、ほとんど明らかにできていない。

ただ、その中で、1984年5月3日に、北沢上流でオトナのオス4頭からなるオスグループを観察した。その時群れは、そこよりも直線距離にして1 kmほど下流で観察されている。このオスグループはその後の5月6日にも同じ場所で観察されている。

群れの周囲に隣接群がいることから(伊沢・遠藤, 1987b)、ハナレザルやオスグループなどのオスが、この隣接群間をわたり歩いていることが十分に考えられる。

8、食性

奥新川の群れの食物について、1987年までの調査で明らかになったのは、草本および木本植物50種(表3)、きのこ類8種、数種の地衣類、数種の昆虫などである。

このうち、きのこ類としてはカワラダケ、シロシメジ、シイタケ、ドクベニタケ、ヌメリイグチ、ヌメリスギタケ、ヌメリツバタケ、ヒラタケを採食しているのが確認されている。また、昆虫類としては、夏季に木上でセミをつかまえて食べるのが観察されたほか、枯木の皮をはがしてその中

の幼虫を食べるのも観察されている。

年間を通しての主な食物の季節変化をみると、春はブナ、カエデ、ヤマザクラ、ケヤキなどの花や若葉、夏はヤマグワや、クマイチゴなどイチゴ類の実、秋はクリ、ブナ、コナラ、ミズナラの実、冬の積雪期はヤマグワなどの樹皮や冬芽、ブナ、コナラ、ミズナラの実の拾い食いなどである。どの季節にどの植物のどの部位が採食されているかも表3の中に示されている。

また、年によってもそれぞれの季節の主な食物に違いがみられる。例えば1983年の9月から11月にかけては、コナラの実が集中的に採食されたが、翌1984年の同時期にはコナラの実も結実していたものの、ブナの実が集中的に採食された。このような年による食物の違いは、その食物が豊作であったかどうかに関わってくるが、いくつかの食物が豊作であった年でも、集中的に採食する食物とそうでない食物とがみられる。例えば、群れがブナの実を集中的に採食していた1984年は、ブナが豊作であったばかりでなく、前年の主な食物であったコナラの実も豊作であった。にも関わらず、群れはコナラの実よりもブナの実に執着を示していた。このことについては、金華山のサルの食性で伊沢(1984a)が指摘しているように、群れの“好み”の問題に関わっているように思われる。

ところで、奥新川の群れで特徴的なこととして、第1に3月から5月にかけてのフキの花茎(フキノトウ)食いがあげられる。3月、4月の花茎が伸びる前の、いわゆるフキノトウの状態の時にはその葉を採食し、5月以降花茎が長く伸び、花が開花した後は花、葉を除いた茎の部分で採食する。これは、群れの多くの個体で観察されている。このフキノトウ食いは、東北地方の他地域では山形県と福島県の県境の西吾妻山の野生群でも観察されている(山形県米沢市・遠藤亨氏、私信、および筆者の調査)。かつては奥羽山脈に沿って、南は吾妻山系までニホンザルが連続分布していたと考えられることから(伊沢・遠藤, 1987a)、もしかするとこのフキノトウ食いは、奥羽山脈沿いのニホンザルに共通してみられる特徴であるかもしれない。

第2は、秋から冬にかけてしばしばみられる草本植物や木本植物の幼木の地下部分を採食する点である。これまでに観察されたものとしては、コナラの幼木、シロツメクサ、ササの幼木などの地下部分がある。いずれも、手で引き抜いた後、しごくようにして地下部分についた土を落し、地下茎

や根の部分のみを採食する。このような地下部分の採食は決して集中的に採食されるといったものではないが、毎年観察されている。

9、遊動と遊動域

奥新川の群れがこれまでに利用していた場所の外縁部を線で結ぶと、およそ30 km²におよぶ(図2)。

群れは4月から11月までの非積雪期には、北沢とコノコイ沢、金井沢、岩象沢、奥新川岳、荒沢を結ぶ地域を中心に、尾根や沢を横切るような形で遊動している(図3③)。

一方12月から3月までの積雪期には、北沢から新川川にかけての沢沿いを中心に振子状の遊動を繰り返している(図3④)。

これは、非積雪期には群れが広い地域に食物を求めて遊動できるためであり、積雪期には多くの積雪によって、食物を得られる地域が北沢や新川川などの沢沿いに限られるためであると考えられる。

このような遊動域の季節変化のほかに、群れが1983年以降、積雪期を中心に遊動域を拡大していているのがみられる(図3⑤)。

このことをもう少し具体的にみると、1983年から群れはそれまで遊動していなかった新川川下流方向に遊動し始めるようになった。そして1985年頃から頻繁に作並峠を越えた下流地域を使うようになり、1986年にはさらに尾根沿いにずっと下流の新川の集落まで行くのが観察されるようになった。また、このような遊動域の拡大とともに、奥新川と尾根をひとつはさんだ反対側の作並側の斜面も利用するようになった。これらの地域は特に、非積雪期よりも積雪期に多く利用している。この作並峠より下流の地域は、標高が400 m前後と比較的低く、山の斜面もゆるやかである。しかし、細かい沢が複雑に入り組んでいるため風があたりにくく、冬でも寒さをしのげる場所が多い。また、この地域はクリ・コナラ林が多く、群れもクリの実やコナラの実をここで採食している。

奥新川の群れが遊動域を拡大した理由としては、第1に群れの遊動域内の森林の伐採があげられる。奥新川一帯に、ブナの原生林が限られた場所にしか残されていないことはすでに述べたが、その限られた原生林の中でも比較的広く原生林が残っていた南沢の支流金井沢のブナ林が大規模に伐

採されてしまったことがこの問題に大きく関わっていると考えられる。金井沢のブナ林には、春の山菜や秋のきのこのほか、群れの主要食物であるブナの実が豊富にある場所として群れもよく利用しており、北沢からコノコイ沢を越えて南沢に抜ける際の通り道ともなっている場所であった。ところが1983年から金井沢に向けて、北沢から南沢左岸斜面を通る南沢林道の建設が開始された。この時、建設中の作業員が工事現場を群れが何度も通っていくのを目撃している。この時点ではまだ大規模な伐採は行われていなかったが、何台もの機械や、爆薬を使っての建設工事が彼らの遊動に全く影響を与えていなかったとは考えられない。そして1985年に入り、大規模な伐採が始まり、うっそうとしたブナの原生林に覆われ、奥新川の群れに豊富なブナの実などの食物を提供してきた金井沢は丸裸になってしまった。伐採が始まった1985年の群れの遊動をみると、急激に下流地域を利用するのが多くなっている。また林道工事が始まる前の1982年には、秋に実ったブナの実が、南沢の左岸斜面に落ちてくるため秋から冬にかけて群れが利用することが多かったが、林道工事と伐採が行われた年以降は、この南沢左岸斜面をほとんど使わなくなっている。これは、ブナの伐採によって、南沢左岸斜面に落ちてくるブナなどの実の量が大幅に減少したためと考えられる。このように伐採によって彼らの食物の量が減少したことによって、それに代る食物を求めて新川川の下流地域に遊動域を広げていったものと考えられることである。

第2に、群れが下流地域を利用し始めたのが1983年であることはすでに述べたが、この年の秋には、主要食物であるブナの実がほとんど結実しなかった。そこへ奥山での伐採が始まったことが重なって、コナラやクリの実を求めて下地域を利用し始めたと考えられる。また、その冬は先に述べた異常気象と呼ばれた例年よりも厳しい冬であったことも、彼らがこの地域を利用した要因として考えられる。この地域の南向きの斜面は大変日当たりがよく、積雪が奥山に比べて少ないため、彼らは容易に雪をかき分けて秋に落ちたコナラなどの実を手に入れることができる。そうなれば、大雪で厳しい冬であればあるほど、食物が手に入りにくい奥山を捨てて、雪の少ないこの地域を利用するようになるのは当然といえるだろう。

第3には、群れの個体数の増加に伴う分派行動の頻発と、分派したグループによる遊動域の拡大である。

以上述べた3つの要因はそれぞれ独立したものではなく、互いに関連し

あって群れの遊動域の拡大につながったと考えられる。

また、群れが新たな場所に遊動域を広げていく、ひとつのきっかけとして、次のような情報が得られている。それは、群れが下流地域を利用し始める前の1982年秋頃から、時々これまでサルが見られなかったこの地域に数頭のオスグループが見られるようになったということである（日高行男氏、私信）。群れが新しい場所を利用する以前に、このようなオスたちがすでに利用していることは興味深い事実である。

このほか、奥新川の群れは泊まり場として急峻な斜面の二次林の木上をよく利用しているが、冬季、季節風が強い吹雪の夜などは、新川川や北沢、南沢などのほぼ垂直に近い岩場の沢底近くを利用することが多い。

10、隣接群について

奥新川の群れに隣接して、およそ3群が生息していることが分かっている（伊沢・遠藤，1987b）。北から順に、関山峠一带、熊沢から大綱鳥沢一带、そして南の高倉山から名取川水系の二口谷一带のそれぞれの地域に群れが生息している。

これらの群れのうち、熊沢一带の群れと、奥新川の群れの間には、広瀬川と国道48号線が境として通っている。そして、これまで奥新川の群れがここを渡ったことがないことから、両群間には群れの接触といった直接的な関係はないと思われる。

一方、北の関山の群れと南の二口の群れは遊動域の一部が重なっていると考えられる。その場所は、これまでの観察から、二口の群れとは高倉山付近で、関山の群れとは北沢の上流小新川沢付近だと推定される。

11、他の動物との関係

奥新川には、ニホンザルのほかにツキノワグマ、ニホンカモシカ、ホンドリギツネ、ホンドリタヌキ、ニホンアナグマ、ホンドリイタチ、ホンドリテン、ノウサギ、ホンドリリスなどの哺乳類と、クマタカ、オオタカ、ハイタカ、フクロウなど猛禽類を含む多くの鳥類が生息している。この中でサルを襲

って捕食できる動物としては、ホンドギツネと猛禽類があげられるが、これまでにサルが捕食された事例は観察されていない。

このほか、他の動物とサルとの関係では、カモシカとサルとの接触がしばしば観察されている。そのほとんどは、サルもカモシカも互いに無関心であり、互いの存在を全く気にしない様子でそれぞれが行動していた。しかし、1例だけであるが、カモシカがサルに対して“ビャッ、ビャッ”という威嚇音を発して、サルとは反対の方向に走っていったのが観察されている。この時観察者は大きな沢をはさんだ対岸におり、それまでにカモシカもその存在に気付いていたことから、この威嚇音が観察者に対して発せられたものではなく、明らかにサルに対して発せられたものであることがわかる。サルは移動中であり、すでに何頭かがカモシカのそばを通過していった。そこへ、3頭のアカンボウがじゃれあいながら、走ってカモシカの近くに近づいてきた。ところがサルはカモシカの存在に気付いていなかったようで、急にカモシカの姿を見つけた1頭があわてて少し後ろから移動してきていた母親の所へ逃げていった。すると2頭のオトナノメス（母親であると思われる）が軽く“ガッ”と声を発してカモシカの方へ近づいた。その時、カモシカは先に述べたような声を発してサルを避けるように走っていった。この事例は、普通は無関心でいるサルとカモシカも、なんらかの原因で突発的なことが起こった時には互いに威嚇することもあるということを示している。

12、猿害と保護について

奥新川の群れでは、その遊動域の中に人家や畑が少なく人間との接触も多くなかったことから、猿害はほとんど起きていない。これまでの調査で、群れが畑に広がっているのが何度も観察されている。その時畑にはとり残しの白菜や大根があったにもかかわらず、それらには目もくれずもっぱら畑に自生した草本類を採食していた。

しかし、アンケート調査では奥新川の群れが新川地区の水田に出て米を食べているという回答が得られているし（伊沢・遠藤，1987a）、1983年からは奥新川の駅近くで栽培しているシイタケが根こそぎ食べられてしまうようになっている。

奥新川のサルの猿害はまだ深刻でないが、奥山の森林が伐採され、群れがより人家に近い下流地域を利用することが多くなっていることによって、これまで接触の少なかった人間との接触が多くなり、より人間に慣れていくことが考えられる。実際に、調査を始めた頃は、群れは人の姿を見るとどんどん逃げてしまい、調査も大変苦勞した。しかし、群れが下流地域を利用し始め、観光客との接触が多くなった頃から、群れはどんどん人に慣れていき、かなり近くまで群れに近付けるようになった。

サルが人に慣れ、人を恐がらなくなっていくことによって、今後一番心配されることは、人間がサルを食物を与えることによってなつかせようとすることである。奥新川のサルが人間の食物の味を覚えることによって芋煮会などの観光客とのトラブルが起こったり、畑の作物を荒すようになるだろうことは、これまでに猿害が起こっている各地の例からも明らかである。これまで観光客や工事現場の作業員たちがサルの通り道にバナナやリンゴ、大豆などを入れた袋をいくつも木の枝にぶらさげているのを、実際に何度も見ている。幸いなことにサルはそれらにまだ見向きもしていないが、今後もサルが食べないとは言い切れない。また、このように直接食物をやらなくても、芋煮会やキャンプの後に残った、ゴミや残飯をサルが食べることによって、結果として同じことになってしまうことも十分に予測できる。

これまでに猿害が起こっている各地のサルをみると、そのほとんどは最終的に、集団捕獲、あるいは射殺という最悪の道をたどっている。この奥新川が県立自然公園の一部に指定されていることや、今後リゾート地としての性格が強まり、多くの観光客が訪れることが予想される以上、早急に保護のためのしっかりとした方策を考え、実行していくことが必要だろう。また、彼らが素晴らしい野生の姿をずっと保っていくためには、なによりもすみかである森林を守ってやることが重要だろう。

謝 辞

宮城教育大学の伊沢紘生先生には、調査中は勿論、本報告書をまとめるにあたりいろいろとご指導をいただきました。また、奥新川の調査を開始した当初からサルに関する貴重な情報を提供していただいたばかりでなく、

様々な便宜を図っていただいた仙台市奥新川の日高行男氏、故日高きよゑ氏、同作並の横田菊江氏をはじめ、貴重な観察データを提供していただいた宮城教育大学第29合研の学生諸氏及び卒業生諸氏など、お世話になった多くの方々に心から感謝致します。さらに、サルに会えず最も苦しかった調査初期に、共に群れを探してくれた柴田町教育委員会の藤原政志氏に深く感謝致します。

なお、1985年と1986年の調査では、調査費の一部として京都大学霊長類研究所共同利用研究費を使用させていただきました。

引用文献

伊沢紘生 (1982)

「ニホンザルの生態・豪雪の白山に野生を問う」

どうぶつ社

伊沢紘生 (1984a)

金華山島のニホンザルの生態学的研究・第一報

「宮城教育大学紀要」No. 18

伊沢紘生 (1984b)

白山地域における野生ニホンザルの群れの分裂とその生態学的意味

「石川県白山自然保護センター研究報告」Vol. 10 P. 99~109

伊沢紘生、遠藤純二 (1987a)

アンケートによるサルの分布と民俗

「宮城県のニホンザル」Vol. 1. 1

伊沢紘生、遠藤純二 (1987b)

群れの分布と頭数

「宮城県のニホンザル」Vol. 1. 2

OHASHI & SUGAYA (1963)

A FLORISTIC STUDY OF MT. O-AZUMA,
MIYAGI PR, AND ITS NEIGHBOURHOOD

「ECOLOGICAL REVIEW」VOL. 16

佐藤静枝 (1988)

金華山のサルの生態

「宮城県のニホンザル」Vol. 1. 3 P. 6~29

滝沢均、志鷹敬三（1985）

白山のニホンザル群，カムリA・C両群の大量消失に関して

「石川県白山自然保護センター研究報告」VOL. 12 P. 49～57

ふるさと宮城の自然編集委員会（1988）

「ふるさと宮城の自然」

宝文堂

【資料】

表1 奥新川の群れの個体数と構成

性年齢区分 \ 観察日	82 107	83 315	83 53	831127	83 124	84 916	85 17	85 210
オトナのオス	5	13	4	3	4	3	5	5
オトナのメス	5	12	25	10	23	9	14	21
ワカモノ(5～6才)	4	6	2	7	5	2	6	10
コドモ (2～4才)	4	14	14	3	11	11	14	15
コドモ (1才)	0	5	14	1	8	7	12	4
アカンボウ(0才)	3	3	6	8	12	4	6	6
不明	6	2	3	5				
合計	27+0	56+0	68+0	37+0	63+0	36+0	57+0	61+0
性年齢区分 \ 観察日	85 55	85 77	851210	86 112	86 211	86 831	87 118	
オトナのオス	5	2	4			7	11	
オトナのメス	7	11	10			16	17	
ワカモノ(5～6才)	1	7	3			7	7	
コドモ (2～4才)	7	14	6			11	7	
コドモ (1才)		1	2			9	3	
アカンボウ(0才)	4	9	3	3	5	7	1	
不明		3	1			8	37	
合計	24+0	47+0	29+0	71+0	40+0	65+0	83	

表2 奥新川の群れの分派行動

観察年月日	分派グループの観察場所とグループ間の直線距離		
1983. 4. 14 ~15	北 沢 (約20頭)	片津沢 (40 ~50頭) 2 km	
1984. 11. 3	四ノ沢 (不明)	荒沢下流 (約30頭) 2.5 km	
11. 23	二ノ沢 (40 ~50頭)	オオノコイ 沢下流 3.1 km	
1985. 1. 15	北 沢 (9+♂頭)	荒 沢 (9+♂頭) 2.0 km	
5. 5 ~6	奥新川岳 (約25頭)	金井沢上部 (約50頭)	北 沢 (5+♂頭) 1 km
12. 1	ハシカケ沢 (約35頭)	作並側斜面 (約40頭) 1.3 km	
1986. 2. 11	新川川沿い (約30頭)	作並側斜面 (約40頭) 0.5 km	
4. 27 ~29	荒 沢 (約20頭)	合 流 点 (不明) 1.8 km	

1983. 1. 27
~29 北 沢 (約20頭) 1 km 南 沢 (40~50頭)

註) この事例は、群れが獵犬に追われて分かれたものであり、ここで述べる分派行動とは異なるものである。

表3 群れの食物リスト

春⊖, 夏⓪, 秋⊕, 冬⊗

部位 植物名	果実	種子	茎	葉	芽	樹皮	根	花	部位 植物名	果実	種子	茎	葉	芽	樹皮	根	花
アオダモ					⊗	⊗			ススキ		⊕						
アカマツ		⊗				⊗			タカノツメ					⊗	⊗		
アカシデ						⊗			クニウツギ					⊗			
アケビ	⊕								チシマザサ								
イワガラミ					⊖				ツノハシバミ						⊗		
イタヤカエデ				⊖				⊖	ツルメドキ	⊕				⊗	⊗		
ウバユリ			⊖						ニガイチゴ	⓪							
ウド			⓪						ハリウツギ						⊗		
ウラジロノキ	⊕								フジ		⊗			⊗	⊗		
エビガライチゴ	⓪								フナ		⊕		⊖		⊗		
オクモミジハグマ			⊕						フキナウ			⊖	⊖				
ガマズミ	⊕				⊗				ホウノキ					⊖	⊗		
クマイチゴ	⓪								マタタビ	⊕				⊗	⊗		
クマノミズキ	⊕								マツブサ	⊕	⊕						
クス				⓪					ミスナラ		⊕				⊗		
クリ		⊕			⊗	⊗			モミヅイチゴ	⓪							
クロモジ					⊗	⊗			ヤマグル	⓪				⊗	⊗		
ケヤキ				⊖					ヤマウルシ					⊗	⊗		
コウソ	⓪								ヤマイモ		⊕						
コナラ		⊕				⊗	⊕		ヤマザカラ	⊖							⊖
ササ				⊗	⊗		⊗		ヤマナシ	⊕							
サルナシ	⊕				⊗				ヤマハンノキ						⊗		
シバ				⊗					ヤブレガサ			⓪					
シロツメクサ				⊖			⊗		ヤマホウシ	⊕			⊖	⊗	⊗		
スゲ				⊗													

図1 奥新川の概略図

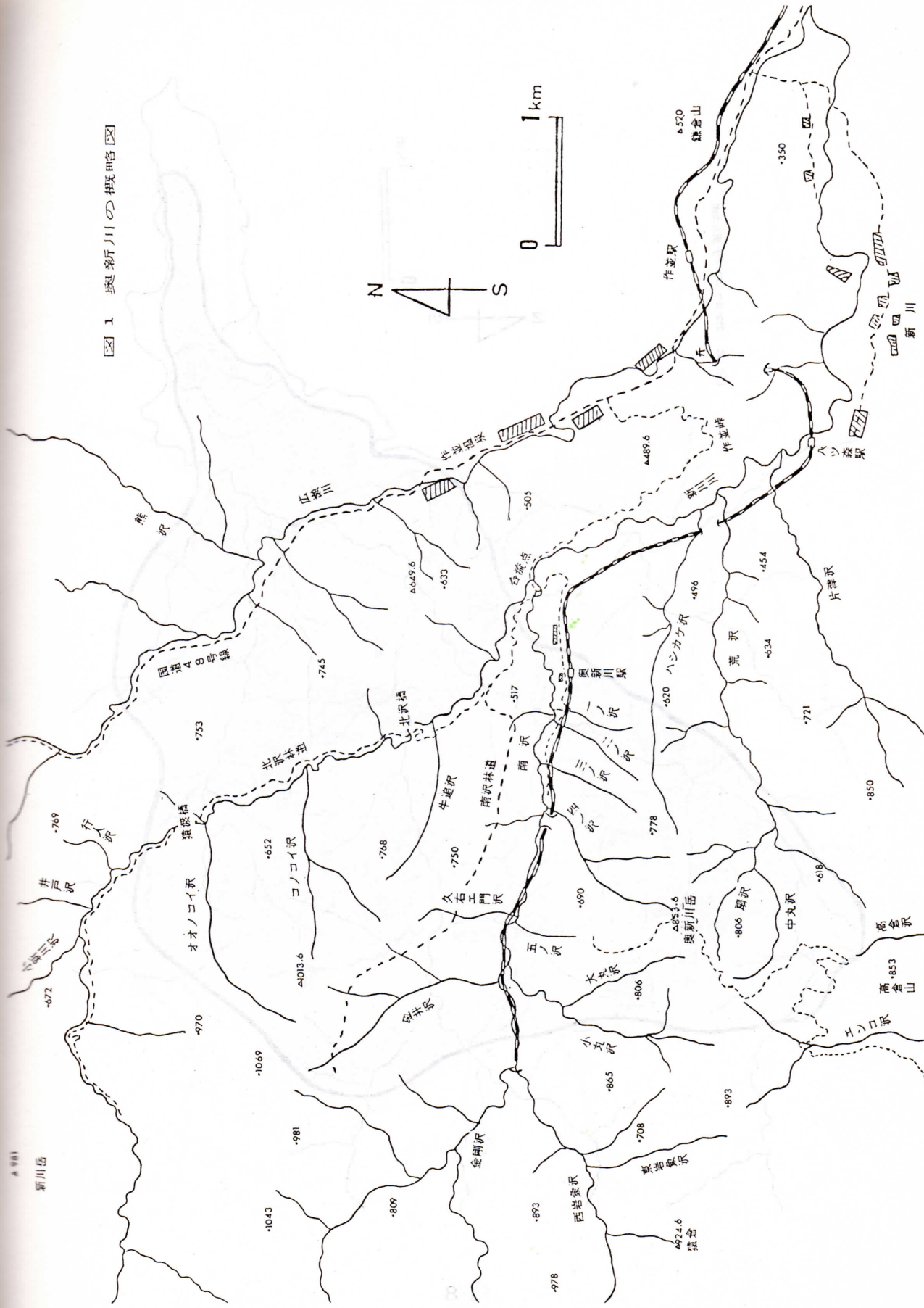
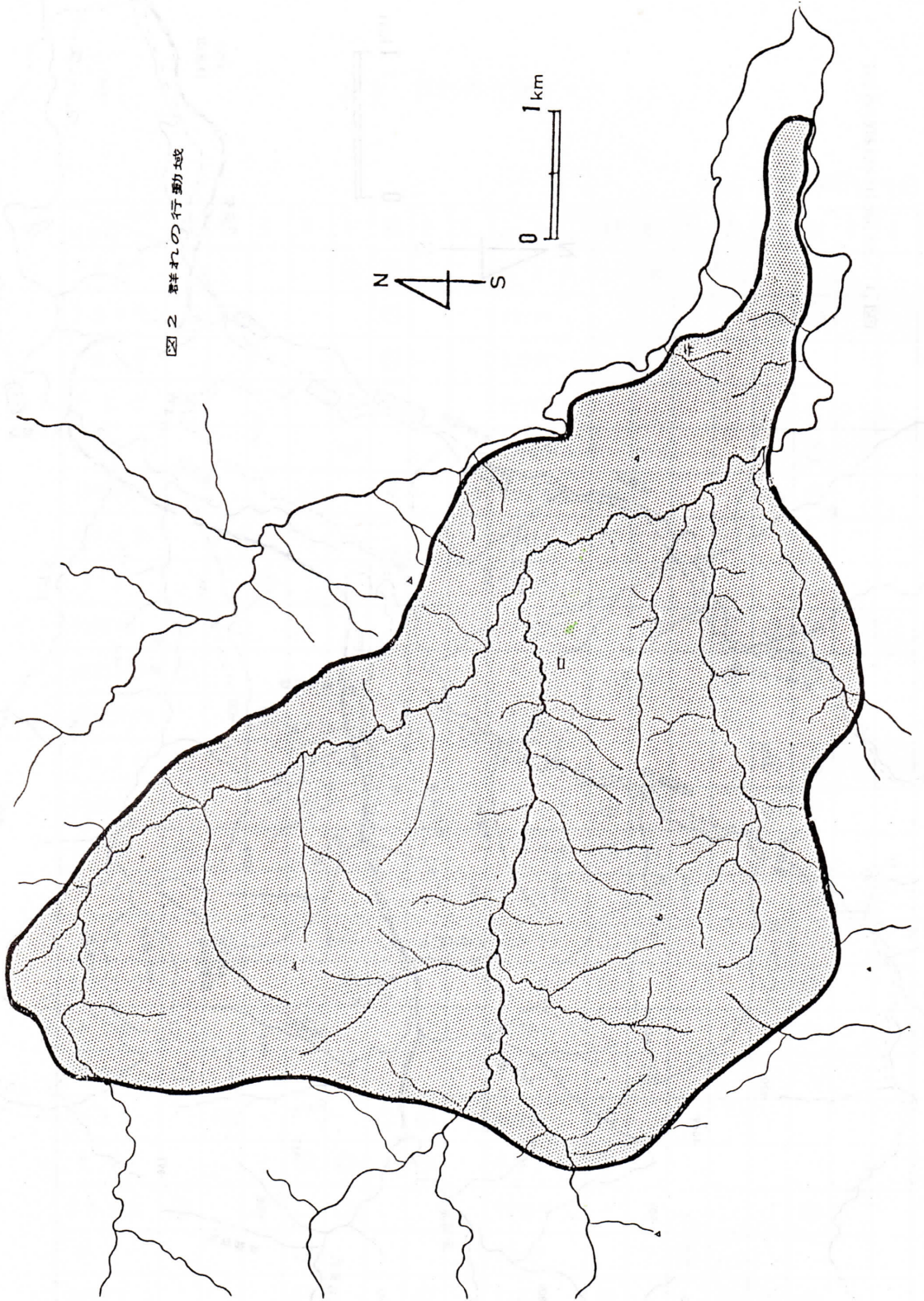


図2 群れの行動域



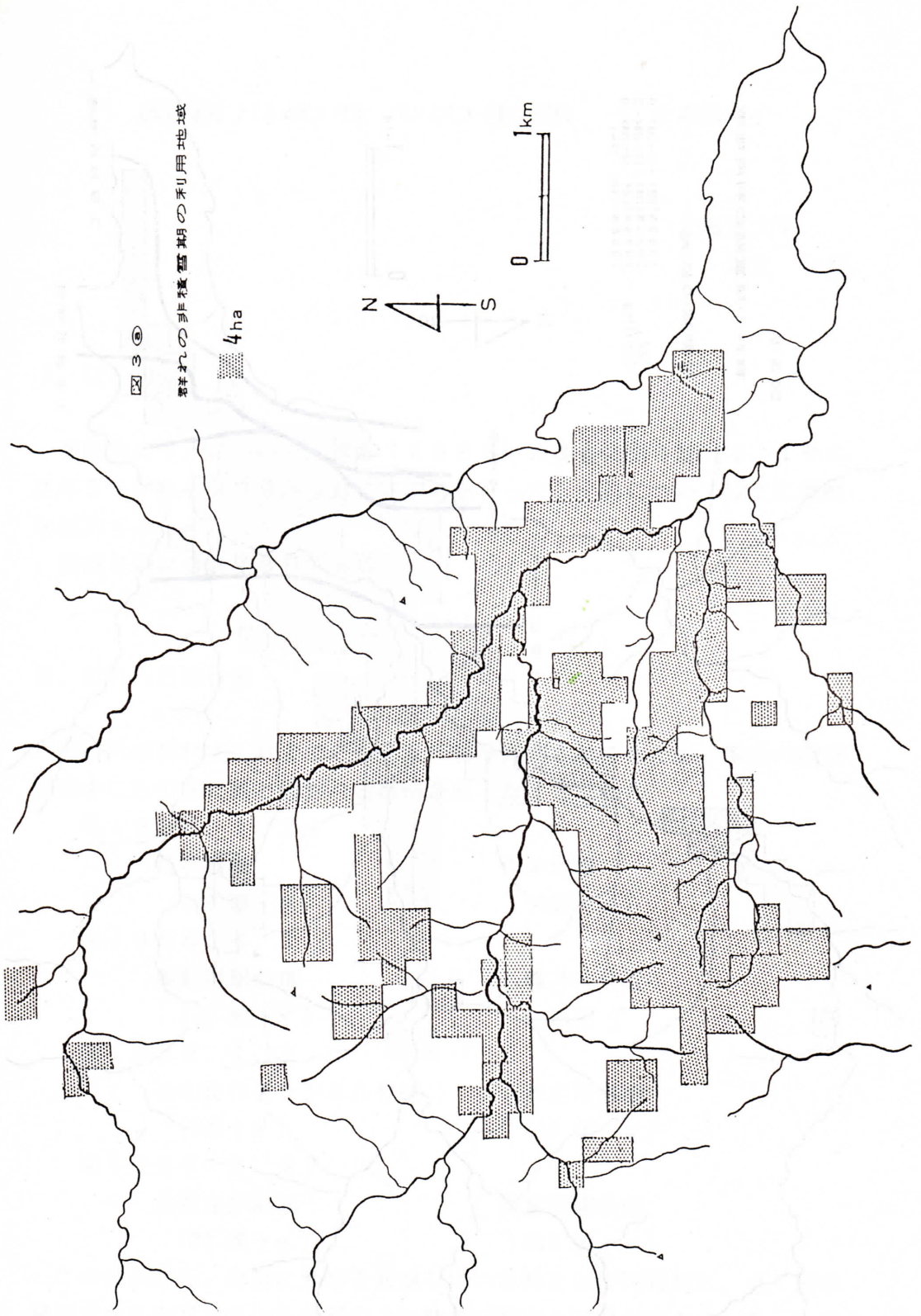


図 3 ③

戦後の非農産期の利用地域

4 ha

N
S

0 1 km

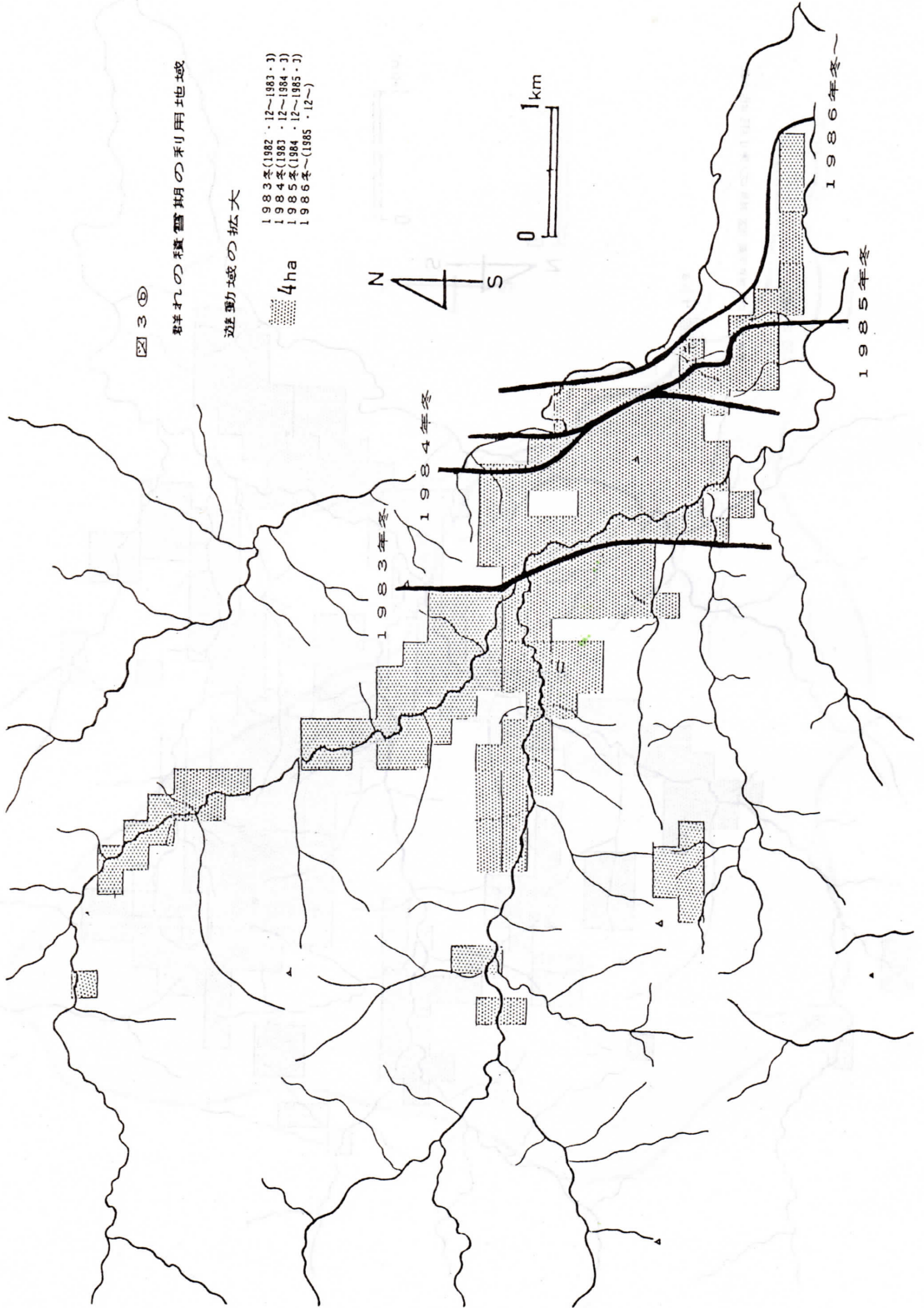
図3⑤

群れの積雪期の利用地域

遊動域の拡大

- 1983年(1982・12~1983・3)
- 1984年(1983・12~1984・3)
- 1985年(1984・12~1985・3)
- 1986年(1985・12~)

4ha



奥新川のサルの生態 - その後 -

北海道大学

鬼丸 和幸

1、はじめに

奥新川のサルについて、遠藤（1989）の調査に引き続いて、1987年5月から1989年3月まで調査を行った。それについて以下に概略を報告する。

観察日数は合計78日である。

2、群れの分派行動

奥新川の群れでこれまでも分派行動が観察されてきたが、筆者の観察期間中にも分派行動と思われる事例があった。すなわち、

① 1988. 1. 31

荒沢鉄橋

(22 頭 + ♀)

作並尾根

(8 頭 + ♀)

② 1988. 4. 1

奥新川駅前畑

(15 頭 + ♀)

八幡神社付近

(不明)

③ 1989. 1. 2

仙山線作並トンネル付近

(9 頭 + ♀)

北沢左岸斜面

(20 頭 + ♀)

④ 1989. 3. 27

北沢左岸斜面

(22 頭 + ♀)

奥新川駅前畑

(53 頭 + ♀)

このほかにも、直接にサルを観察している時とほぼ同時刻に、全く別の場所でサルを見たという地元の人の情報に接することが度々あった。その

いくつかは、情報がハナレザルやオス・グループであった可能性もあるが、いくつかは分派行動をしていたと思われる。

その分派行動の興味深い事例として、1989年3月12日には1群94頭が数えられたのに、3月27日には22頭と53頭の2つの集団が確認されたことである。このことから、群れが頻繁に分派したり、再び元に戻ったりしているだろうということが示唆される。

3、個体数について

群れを発見すると同時に、毎回個体数を数えてきたが、分派した一方の集団のみを数えていることもあって、群れの全頭数を数える機会はほとんどなかった。そのうち、条件の良い状態で観察された3例を表1に示した。この表から、現時点において群れの個体数は90頭前後とっていいだろう。

表1 群れの個体数と構成

観察日 性年齢区分	'88.1.4	'89.3.12	'89.3.27 *
オトナのオス	} 22	8	4 7
オトナのメス		22	7 14
ワカモノ(5~6才)	13	6	1 4
コドモ(2~4才)	} 12	36	4 19
コドモ(1才)		10	1 5
アカンボウ	10	10	4 4
不明		1	1
合計	57+α	94+α	22+α 53+α

*分派していた2つの集団のそれぞれの構成を表には示した。

4、遊動と遊動域

非積雪期においては、遠藤（1989）の報告にあるように、主に北沢、コノコイ沢、金井沢、岩象沢、奥新川岳、荒沢を結ぶ地域を中心に遊動していたが、作並峠付近まで下がってきたこともあった。

積雪期には、分派していた片方が北沢から新川川にかけての沢沿いを、もう一方が奥新川駅から荒沢下流を利用していた。両方をあわせた利用地域は遠藤（1989）の報告と大差ないが、ただひとつだけ注目されるのは、これまで全く利用されていなかった広瀬川流域の、行人沢と南条沢（広瀬川の支流、熊沢の対岸）まで1988年1月7日に遊動したことである。

5、食物について

1987年秋はブナやコナラが豊作であった。また1988年1月中旬まで降雪がほとんどなかった。そのため、この間の1987年秋から1988年春にかけてブナ、コナラ、ミズナラの実をずっと採食していた。その後3月中旬から、草本類（スゲ、ササ、シロツメクサ等）の採食に執着するようになり、この頃は奥新川駅前の畑に現れることが多く観察された。季節ごとの食物は、遠藤（1989）の記したものに準じていたが、遠藤の示した食物以外に確認されたものは以下の通りである。すなわち、コシアブラ、サワグルミ、マンサク、マユミなどの樹皮、ネコヤナギの新芽と花、アケビのつる、カワラダケ、である。このほかに農作物として白菜、アサツキやキーウイの樹皮と新芽を食べていた。

6、その他

1987年12月から1988年1月中旬にかけては、積雪がまったくといっていいほどなく、非常に暖かい冬だった。おそらくそのためだろうが、1月に入ってからも1月3日に交尾行動が見られた。

1988年2月20日には、群れが北沢方面にいた頃、作並峠付近で1

頭のオトナのオスザルを確認した。さらに1989年6月19日には北沢の奥に群れがいたとき、作並峠付近で1頭のオトナのオスザルを確認した。

謝 辞

宮城教育大学の伊沢紘生先生には調査中は勿論のこと本報告書をまとめるにあたりいろいろとご指導をいただきました。また、サルに関する情報を提供していただいたばかりでなく、調査中様々な便宜を図っていただいた仙台市奥新川の日高行男氏、名取政蔵氏をはじめ、共に調査し貴重なデータを提供していただいた石巻市立東浜小学校教諭遠藤純二氏、宮城教育大学第29合研の学生諸氏など、お世話になった多くの方々に心から感謝致します。

— お 知 ら せ —

雑誌「宮城県のニホンザル」はすでに3号を出版していますが、その内容は以下の通りです。

第1号 アンケートによるサルの分布と民俗(20頁)

第2号 群れの分布と頭数(12頁)

第3号 金華山のサルの生態(29頁)

入用の方は「宮城のサル調査会」事務局までご連絡下さい。

〒980 宮城県仙台市青葉区荒巻青葉

宮城教育大学 伊沢研究室

TEL022-222-1021(内 236)

表 紙 題 字

宮城のサル調査会顧問 加藤陸奥雄筆